雁風呂（がんぶろ）：伝説

春好き人

新緑の春になりました。春の季語に「雁風呂（がんぶろ）」があることを友人から教わりました。渡り鳥の哀れと人々の優しさが身に沁みる伝説です。紹介します。

月の夜、雁は木の枝を口に咥えて北国から渡ってきて、飛び疲れると波間に枝を浮かべ、その上に停まって羽根を休める。そうやって津軽の浜までたどり着くと、要らなくなった枝を浜辺に落とす。日本で冬を過ごした雁は早春の頃、浜の枝を拾って北国に戻って行く。雁が去ったあとの浜辺には、生きて帰れなかった雁の数だけ枝が残っている。浜の人たちは、その枝を集めて風呂を焚き、不運な雁たちの供養をしたという。
（from ウイキペディア　雁風呂）

1974 年サントリー角瓶の TV コマーシャルにありました。

青森県には「雁風呂（がんぶろ）」「雁供養（かりくよう）」という伝説が伝わるとされていましたが、青森県内で伝承されたものではないとのこと。

『雁風呂』伝説で語られる雁の行為は、紀元前２世紀頃に成立した淮南子（えなんじ）と言う中国の書物に「葦を啣む雁(あしをふくむかり)」として載っています。「雁が海を渡って遠くへ飛ぶとき、海上で羽を休めるために枯れ葦を口にくわえて行く」ことから、「物事を行うときの準備が完全なこと」を意味します。
実際は、雁は葦をくわえて行く習性は無いようです。

雁風呂や海あるる日は焚かぬなり　　高浜虚子

雁風呂に海のつづきの波がたつ　　澁谷道

雁供養砂の埋れ木焚き添へぬ　　新谷ひろし

「雁風呂」を由来とする古典落語があります。
雁風呂～三遊亭圓生・桂米朝